藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

孤児院訪問

終戦直後、伯父が身寄りのない子の世話をしていたので〝孤児院〟という言葉を時々耳にしたが、一度も訪れたことはなかった。

孤児院という言葉が差別観があるとして昭和二十二年〝養護施設〟になり、さらに平成九年から〝児童養護施設〟となって、日本で孤児院は死語となった。

今回のスタディツアーでベトナムの孤児院を訪ねた。ベトナム最後の王朝の王宮がある古都フエにある施設は尼僧たちによって運営されている。

生後一カ月の赤ちゃんから大学生まで百九十五人が二十四人の尼僧に世話されて生活しているのだ。

訪れた日はウイークデーで、学校に通う子どもは不在で赤ちゃんと幼児に迎えられた。

赤ちゃんの部屋にはアルミ製ベビーベッドがずらりと置かれ、洗濯場には学生服が所狭しと並んでいる。

持参したぬいぐるみで遊ぶ幼児たちを見ながら、百九十五人全員がそろったらどんなだろうかと想像する。廊下には食事風景の写真が展示してあった。

ベトナム全体の孤児の数はわからない。なんとなくベトナム戦争のせいで多いと思っていたが、もう戦争が終わって三十年以上もたっている。戦争のせいだけではない。

日本はどうなっているのだろうと帰国後、調べてみると、二〇〇七年現在だが、施設数は五百六十四、収容児童数は三万八百四十六人。先進国というのにあまりの多さに驚かされた。

先日、五歳の子どもが両親によって餓死させられるという事件が報道されたが〝孤児〟は戦争で生まれるだけではないのだ。

ふと夏目漱石の「吾輩は猫である」の一節が浮かんだ。

「人はみんな俺が俺がと主張し、夫婦はみんな離れる」だ。

漱石は今日の文明社会を予測し、猫の言葉に託したのであろう。確かに物質的に豊かな文明社会は利己的人間を造り出し、人間関係も希薄になった。

戦争はなくなり〝孤児院〟という言葉は死語になっても、大勢の孤児は存在する。

孤児院を訪れたあと知的障害者施設と盲学校を訪問した。そこで我々を歓迎して歌や楽器の演奏をしてくれるのを聴きながら、日本の同じ施設を考えた。

もちろん発展途上国と日本とでは支援の必要性の度合いは違う。

しかし大切なことは共生。口では共生と言いながら日常生活ではそれを忘れている自分がそこにいた。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

ずらりと並ぶベビーベッド

孤児院の食事風景

ダウン症の子どもが歌で歓迎してくれた